

ヤマダさんの勘違い

ヤンデレの婿

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公の山田さんが周りのことを勘違いします。  
当たり前のようにヤンデレ話です。

ヤンデレが始めるのは三話からです。

ヒロインは4人。中でも、「一度主人公を裏切ってしまったけど、なんやかんやあって主人公をもう一度、病む程に愛してしまう」というような後悔ものを多く含みますのでご注意ください。

こんなのを読みたかったです。けど、誰も書いてくれないから自分で書くしかなかったんです！

目次

プロローグ	1
第一話	3
第二話	6
第三話	12
第四話	14

## プロローグ

——別に強くなりたかったわけじゃないんだ。お金が欲しかったわけでも、まして名誉なんて望んでなんかいなかった。

俺はただ、愛されたかったんだ。

——それは、ただの痛い人間で、一方通行な醜い感情でしかなかったんだけど。

気付いた時には、いや、目が覚めた時にはもう取り返しのないところまで来てしまっていた。

異世界転生して、神様とかには会えなかったけども、ありふれたチートみたいなのを手に入れて、「勇者になって魔王を殺して、色々な美女に愛されたい」なんて、クソみたいに恥ずかしい考えで修行して。

冒険者ギルドという、妄想の中だけだと思っていた、ファンタジーな所で沢山の思い出（今思えば黒歴史だけど）を作り上げ、（俺の一方通行な）恋愛も色んな女性と繰り広げて。

ついには人類の敵である魔王を打ち滅ぼした。

——そして、その直後に（俺が勝手に思っていた）恋人達に裏切られた。

——ああ、いや、裏切られたというのは少し違うかな？

だってほら、俺が勝手に恋人だと思っただけだったのだから。

「貴方みたいなのと誰が恋なんてしますか。貴方とするぐらいなら豚とでもしていた方がまだマシですわ。…というか、私達には皆んな、ちゃんとしたフィアンセがおりましてよ？」

とは、ルーベン王国第三王女にして稀代の大魔術師、アリス様のお言葉だ。そのほかにも、2人いた恋人達には手酷く振られたものだ。

当時は裏切られた！なんてこと考えて復讐心とかで一杯だったんだが、冷静になった今となってはよくわかる。

前にも言った通りだが、裏切られたなんてのは俺の勘違いでしかない。そもそも、「自分を愛して欲しいけど、俺は別にお前だけを愛し

ているわけじゃない」などと考えている男を、いったい誰が好きになんてなるものか。それは、ただの独りよがりで、女をただの物としてしか見れてない、クズ野郎の考えだった。

ーけれど、それに気付いた時にはもう、遅すぎて。

俺の勝手に思っていた恋人達、

ルーベン王国第三王女にして稀代の大魔術師、アリス・ルーベンはたった1人での竜殺しを成し遂げた、偉大なるドラゴンスレイヤー、マリーヌ・ペンドラゴン。

その護りは如何なるものにも崩せない、不壊の盾使い、リリイ・ナーガン。

皆んな数年前に結婚したらしい。

ー悲しいし、苦しいことだけれども。

だけど、紆余曲折あつて、それらのことと折り合いを付けることができた俺は、今孤児院で先生をやっている。

ああ、ちなみに俺の渾名は、癒しの勇者ヤマダ。

ー市街では寝取られもやし野郎として名を馳せている、勘違い男である。

## 第一話

ー朝日が昇るとともに目が覚める。窓から入ってくる陽の光に目を細め、今日はどういふことをして子供達と過ごすかを考えながら、パジャマから普段着である、白を基調として所々に金の刺繍が施された美しい神父服に着替える。

俺が経営しているここ、孤児院「ハピネスハウス」は二階作りのこじんまりとした白い一軒家の様な外観をしている。一階は子供達の寝室やトイレなどの居住空間が広がっており、二階は俺の寝室やたまに来る客人用の応接室などがあって、普段は一日の大半を一階で子供達と過ごしている。

そして、着替えを終わらせた今向かっているのが一階にある子供達の寝室だ。ここは男の子用の大部屋と女の子用の大部屋の二つを作っているのだが、今のところは女の子しか孤児院にいない為、自然と向かう先は女の子用の大部屋となる。

階段を下り、大きなホールを通って左にあるのが子供達の寝室だ。

まずは一度扉をノックし、声を掛ける。

ーコンコン。

「朝だよ。今からご飯を作るから、準備ができた子からリビングにおいで。今日は新鮮な卵を使ったオムライスだよ」

なるべく優しく、声を通るように話しかける。

こういう、子供達を考えた行動を取れるようになったのも孤児院を開いてから随分と時間が経った後だった。

ーそういういえばあの子、まだ元気に冒険者活動できているだろうか？

などと、そういった気配りなどを学んだりなど、共に二人で成長してきた自分の初めての子供のことを思い出していると、部屋の中からもぞもぞと動く気配を感じる。

「ーーうう、はい。いまおきまあーす」

ーこの声はミーナかな？

「うん。じゃあ、しつかりと顔を洗ってくるんだよ」

少し甘えたような声に返事を返し、宣言通り朝食を作りキッチンへと向かう。

ちなみに、ここの家の家具などは全て俺や子供達の手作りであり、現代日本のような機能を持ったものも少なくない。というのも、キッチンもまた俺の子供達が作ってくれた家具であり、とても便利なのだ。

トントんと包丁で具材を切り、栄養バランスを考えてサラダなども作ろうかなーなどと思いながら調理をしていると、トタトタと小さな足音が近づいてきた。

「ーーわっ」

背中に軽い衝撃が走る。思わず少しふらついて声を漏らしてしまふ。

「せんせい、おはようー!」

ゆっくりと体ごと振り返って朝っぱらから体当たりなんてぶちかましてきたおバカさんの顔を見る。

ー美しくサラサラとした銀髪をたなびかせてやってきたのはやはりというべきか、今さつき俺の声に返事を返してくれたミーナであった。

いつも通りの口調で、優しく語り掛ける。

「はい、おはようございます。ところでミーナ、先生に挨拶以外にももう一つ、言わないといけないことがあるでしょう?」

「えう? うーんとねえ…あつ、分かった!」

ー本当だろうか。

「せんせい、大好きいー!」

そう言つて胸に思いっきり頭をグリグリと押し付けてくるミーナに、驚きで少し声が詰まった。

「ーーそっか、ありがとう、ミーナ。先生嬉しいな」

ーけど、言うべきことは言わねば!

「…でも違います。急に体当たりして御免なさい、でしょう? 包丁を持っている時にそう言うことをしたら危ないって何度言ったら分か

るのかな?」

ゆつくりとミーナを手で押し返すと、ミーナが大きな青い目でこちらの顔を下からぐっと覗き込んでくる。その表情は、やはりと言うかキョトンとしていた。

「でも、どうせ包丁なんてわたしには刺さらないよ?」



## 第二話

そう、彼女には普通の刃物は刺さらない。何故なら、彼女は吸血鬼族の真祖の末裔であるからだ。

——この世界には色々な高知能生物が存在している。普人族や亜人族はもちろんのこと、魔獣や精霊種など、人型生物以外にも様々な生き物が高い知性で言語を操ったり魔法を使ったりしており、中には人間よりよほど頭のいい者だって存在しているのだ。

そうした事情もあり、実はこの世界は差別や偏見は、元いた世界に比べてよっぽど少ないのだ。

話が逸れた。それはともかくとして、彼女はそういった高知能生命体の中でも最上位に位置するような種族の血を引いており、実のところ俺よりも断然強かったりする。

ではこんな子供にも負けてしまうような俺が、何故魔王を討伐できたのか？

簡単だ。実は魔王はとても弱かった、ただそれだけのことにすぎない。

そもそも、魔王は俺たち普人族にとってはとてつもない脅威だったのだが、世界的に見るとどうやらそういったわけではなく、魔族の中ではそこそこに強い程度だったらしい。

そんなやつが何故魔王になんてなったのか。それらの事情を知ったのも魔王討伐を終えてだいぶ経った後だった。

——俺は、俺はとにかく未熟だったのだ。今でも強く後悔する。何も知らずにへらへらとしていたあの頃を思い出すたびに、自分を殺してしまいたくなる。

「せんせー！どうしたの!?!手、手から血が出るよ!?!」

言われて気づく。どうやら、自分の拳を強く握りすぎて爪が掌に食い込んでしまっていたらしい。

「せんせー!」

——心配を、掛けてしまったのだろうか？

いや、それはそうだろう。いきなり目の前で強く手を握って血を

流し始めたのだ。また失敗した。早く謝らなければ。

「俺はいつもそうだ。なんでこんなにー」

「ーいや、違うだろう。また考えすぎておかしな方に進むところだった。とりあえずは謝罪を、と俺が口を開こうとするとー」

「ーその血、舐めていいー?」

ペロツ、と音を付ければそういう風になるのだろうか。急に血を舐められた。

「ひうつ」

思わず恥ずかしい声が漏れる。

注意しようとして口を開こうとするが、それより早く彼女が話し始める。

「えへへえー。くすぐったかったでよー?ー元気、出た?」

「ー息が詰まった。子供に気を使わせてしまうなんて、先生失格である。最近、色々ゴタゴタがあつて弱気になっていたのかもしれない。」

頑張らないといけないな。

「うん。元気、出たよ。ありがとうね。ーでもね、ミーナ。相手に許可を得る前から血を舐めちゃ聞く意味がないでしょう?」

まあ、注意はするんだけど、ね。それとこれとは別ということ。しっかりとした子に育つて欲しいから。

「えー? …まあ、いつか。はーい。今度から気を付けまーす。」

「うん、よろしいーじゃあ、先生オムライス作っておくから、ほかの二人もちやつちやと起こしてきて?」

「おむらいすー!?分かった、急いで起こしてくるねー!」

ドツプラー効果音だったかな? とにかくその様な音を響かせながら走っていくミーナに、思わず笑みが浮かぶ。

「いけないようにねー」

恐らく、こけても怪我なんてしないよーなんて言うのだろうけれど、念のため声を掛ける。

「こけても怪我なんてしないよー!」

今度こそ声を上げて笑ってしまった。

オムライスを作り終わり、テーブルの上に配膳していると、後ろから声をかけられる。

「先生、おはようございます。今日の朝ごはんはオムライスですね？とても嬉しいです。お代わり、ありますでしょうか？」

この声に、とても十代とは思えない声の落ち着きよう、そしてちやっかりとはった食い意地。かつて仲間だった、大魔法使いアリスに本当にそっくりだなあなんて思いながら振り向くと、やはりそこに居たのはアリスの面影が強く見える顔立ちをした女の子、アリシアだった。

だが、偶然というべきか否か、アリシアとアリスは赤の他人である。事実、アリスには子供がいない様だし、王国で新しい王族の子が生まれたというニュースも無い。

不思議なものだ、と思う。思うが、別にこの子に憎しみなんてこれっぽっちも抱いてなどいないし、寧ろ自分の子供として愛している。勿論、アリス自身にも恨みなんて持つてはいないが。

「うん、おはようアリシア。…でもごめんね？お代わりは作ってないんだ」

「そ、そうですか…。なら、仕方ありませんねー」

そんな悲しそうな顔をしないでほしい。別に作っていないだけで用意は出来るのだから。

「ー」だから、一緒に何か作ろっか？オムライスを食べ終わってからだけど、ね」

「ー」あ、は、はいっ！い、一緒に作りましょう！何を作りますか！？私はなんでもいいですよ！先生と一緒にならなんでも！」

クリクリとした、大きな紅い瞳を輝かせ、ふわふわとした金髪を跳ねさせながら全身で喜びを表す彼女に微笑んでしまう。

「ー」ふあっ…」

と、急にフリーズするアリシア。

「ん？どうかした？」

「あっ、い、いえ。なんでもありません、はい。急に止まったりしてごめ

んなさい…」

この反応を見ると分かると思うが、実はこの子、とても感情の浮き沈みが激しく、こんな何でもないことでもひどく気にかけてしまうのだ。

「んーん。ただちよつとアリシアが心配になっただけだから、気にしなくてもいいんだよ？」

そう言っと思っていきり抱きしめる。この子はこういった身体的スキンシップをとっても喜んでくれる子なのだ。

「あ、あ、はひい！分かりました、お気遣いありがとうございます！…先生、せんせい、せんせい、せんせえ！」

そういつて思いつきりこちらを抱きしめてくる。この子はあまり物理的な力が強い方ではないから、こういったスキンシップでも安心して取ることが出来る。

しかしほんとうにこの子は感情の高低が激しい。

ー孤児院を卒業した後が心配になるな。

「ーうん、じゃあ折角のご飯が冷めちゃうから、早く食べよつか？」

席について、ね？」

「う、あ、は、はい。いま、席に着きます。…あ、あの。一緒にご飯、作ってくださいますか？」

こちらの機嫌を伺う様に上目遣いで聞いてくる。気にしていない、と言ったのにとても不安げな顔だ。

「うん、もちろんだよ。先生が今までアリシアに嘘なんてついたこと、あつたかな？」

「あつ、い、いえ！べ、別に先生を疑っていたなんて！ 決して、決してそのような訳では…！」

ふ、振り出しに戻ってしまった。この子はこういった臆病になっってしまうようなトラウマなど持っていないはずだから、生まれつきのものか…もしくはただ単に俺が知らなかっただけ、か？

とにかく慰めてご飯を食べさせないと。

「うん、分かってるよ。ごめんね？ あんまりアリシアが可愛いから先生意地悪しちゃった」

嘘である。別に意地悪をしたかった訳ではない。まあ、アリシアが可愛いのは事実ではあるが。

「あつ、あつ、えへ、えへへへえ。い、いいんですよう！　アリシア、全然気にしてなんていません！　むしろ、嬉しかったというか、はい！」　逆に、どんどん意地悪してくれた方がいいくらいで…！」

まずいな、早くご飯を食べさせたいのだが。

「そう？　そういつてくれると先生嬉しいな。さ、一緒にご飯、食べよっか？」

「あ、は、はいっ！」

そう言つてテーブルの方に駆け出すと、急いで席に座る彼女。

と、見ると子供達がいつのまにか全員揃っているではないか。早くご飯を食べたそうにしているミアに、うつとりとした目でこちらを見てくるアリシア。そして――

「先生」

「あ、うん。ごめんね、今行くよ」

薄緑色の、柔らかくウェーブしたショートヘアの髪に、エメラルド色の瞳を半目にしてじつとりとした視線を送ってくる子、ドリアードのエル。ドリアードの特徴が現れている、頭に咲いた黄色の花がまた美しく、とても彼女に似合っている。

――いつのまに來ているのか全く気がつかなかつた。未だにじつとこちらをにらんで？いるエルに、おはようと声を掛けて微笑む。

「…」

こつくりと頷くエル。基本的にエルは無口でそんなに喋らないので、あまり気にしない。

「じゃあ、早く食べよっか？」

頷くエル。ブンブンと頭を振るミア。そして、未だにうつとりとしているアリシア。

――アリシアさん？…大丈夫だろうか？

少し不安に思いなながらも急いで席に着き、合掌の合図をとる。

「じゃあ、頂きます」

「いただきまあす！」

「ーはっ…有り難く頂かせていただきます！」

「…いただきます」

「ーまあ、結局はばらばらになるんだけど、ね。」

### 第三話

かつての仲間たちに見捨てられた時はやさぐれて、もう二度と他人と関係を持たずに生きていこうと思っていた。けれど、今こうして子供達とテーブルを囲んでご飯を食べるのが本当に幸せで。

そして、たまたま不安になる。

もしかしたらこれは夢なのかもしれない。もしかしたらみんなが急に俺のことを蔑んだような目で見てくるのかもしれない。

そんな事を考えてしまうと、もう止まらなくなる。

「先生…？　　どうかなきさいましたか!?　　どうしてそんなに震えていらつしやるのです？　　何か、何か嫌なことでも御座いましたか？」

震えている？　　ああ、そうか。震えているのか。いけないな。ついさつきミーナに元気になったと言ったのに。しっかりとすると誓ったのに。

「先生…。私を、アリシアの目を見て下さい。」

その声に身体が勝手に従って顔を上げてしまう。

「先生、今ここに貴方の敵は存在しておりません。安心して下さい。安心して、今何を思っているのかを私に教えて下さい。」

アリシアの妖しく光る瞳に意識が吸い寄せられる。なんとなく思考に霧がかかっていくような感じがして、とても安心する。

「先生。先生は、今どうして震えていらつしやったのですか？」

頭が働かない。眠い。ああ、意識が遠くー

「ー今が幸せで、幸せでたまらないから、怖くなったんだ。いつか君達が急に消えてしまうんじゃないかって。もしかしたらこれは夢でみんな本当は居ないのかもしれないって。」

「ーほんとうはぼくのことばかりなのかもしれないって。そうおもうとこわくてなきそうになるんだ。」

「ーーっ！ああ、ああ、ああ！先生…！安心して下さい！もう、もう二度とわたくし達は貴方を裏切りません！だから、だからどうか安心して下さい、ヤマダ。ここには貴方の敵はおりません。ここに

は、貴方を幸せにしたいと、そう願っているものしか居ないので！  
貴方を幸せにするためだけに存在するものしかいないのです！」

あたまをだきしめられる。あたたかいな。ふわふわしてあんしんする。

「そうだよ、ヤマダ。私たちはもう二度と君を裏切らない。誓ったんだ。君を幸せにするって。だから、だからその為に私たちは今こうして——」

「ミーナ。それ以上先は、たとえヤマダが忘れてしまおうとしても言っ  
てはいけない。私たちはそれを知ってもらいたくてここにいるわけ  
ではないのだから」

「——ああ、そうだね。ごめん、熱くなりすぎたようだ」

「ええ、気をつけてちょうだい。何を切っ掛けに催眠が解けるか分  
からないのだから」

「そう。それに、もうすぐ先生の意識が戻る。だから、お喋りはここま  
でにしないと」

「ああ…。最近、先生がどうもおかしい。催眠をかけ続けるのも心苦  
しいし、私たちの手で原因を突き止めないとな」

みんながなにかいってる？あたまにはいらぬ。あたまがポカ  
ポカしてきもちいい。ああ、もうねむっちゃいそうだ。

「ああ、お休みなさい、ヤマダ。いい夢を」

うん、おやすみなさい——。



## 第四話

「……、うん？」

「……目が覚めた。…目が、覚めた？　　おかしいな。眠った記憶など無いのだけれど。」

「あ、先生。おはようございます。ご飯を食べ終わってすぐ眠っちゃうなんて、先生おねむさんなんですわねー」

「そうか、朝ごはんを食べてすぐに眠ってしまったのか。」

「うん。おはよう、ミーナ。ごめんね、先生、どれぐらい眠っちゃったのかな？」

「そもそも眠りに落ちた時の記憶がないけれど、寝すぎてないか不安だったんで、一応のため確認をしておく。」

「えーっとねー、10分ぐらいだよー？」

「良かった、あまり寝すぎてしまっていたわけでは無いようだ。本当に、最近はいろいろとあったから疲れてしまったのだろうか。」

「そう思いながら、これからの予定を考えていく。」

「取り敢えずは、洗濯物を干して、お昼ご飯の下準備と、それから掃除に今日の分の授業をして、後は……」

「ねー、せんせい、どうかしたのー？」

「……うん、今からの予定を考えてたんだよ。」

「急に黙りこんだので不安にさせてしまったのだろうか？」

「予定ー？　　ん…、あ、あのねあのね、ミーナ、あいす食べたい！」

「あの、カフェで売ってあるオレンジ味のやつ！」

「そうだな、今日は冒険者ギルドに用事があったので街に行く予定ではあったし、丁度いいかもしれない。」

「そう思いながら、しかし、ミーナには我儘に育って欲しくないのだから少しだけ注意する。」

「ミーナ、「昨日も甘いもの食べに屋台に行ったでしょう？」　　少しは我慢しないと、将来太ったおばあちゃんになっちゃうよー？」

「おかしいな、脅しているみたいになっちゃった。」

「えー？　　ミーナ、吸血鬼だから太ったりしないよー？　　まった

く、先生つてばお馬鹿さんのね？」

訂正しようと口を開くと、ミーナがそのようなことを言ってきた。嘘だよ、と言って頭を撫でて終わらせようとしていたけれど、予定を変更し、伸ばした手をそのままミーナの背中へと回す。

「なんだとぅー！　この生意気娘めー！」

そして、そう言いながらミーナを抱き寄せて、思いつきり頭をわちやわちやとかき回す。

「きやあー!!!　やーめーてー！」

ミーナが笑いながらそう叫ぶのがおかしくって、二人で笑いながらじゃれ合う。

と、ドタドタと階段を走って降りてくる音が聞こえてきたので、ミーナとじゃれ合うのを一旦停止して扉の方を見る。

「せんせいー？　もつとしてえー！」

ミーナが不思議そうにこちらを見たかと思うと、そう言っ頭を俺の胸にグリグリと押し付けてくる。

そう言われてしまつては仕方がないなあ、なんて口では言いながらも、こんな風に甘えてくる子供が可愛くって思わず頬が緩んでしまふ。

「ミーナ！　先生に一体何かあつ……何を、なさっているのですか？　先生？」

現れたアリシアに視線を向けると、昏い瞳と目があった。何故か感じる寒気に身を震わせて、しかし、アリシアがこのような目を向ける理由が分からずに、アリシアの視線を――

――あつ

アリシアの視線を追って自分を見てみると、どうしたことだろうか。

ミーナと今にもキスをしそうな体勢に見えないこともないのではないだろうか？

いや、いやいやいや、待ってほしい！　俺は自分の子供に手を

出すような人間ではないとアリシアならわかってくれているはずだし、そもそも愛する家族にスキンシップを取る手段として、キスとい

うのは一般的な表現方法なのでは無いだろうか？　大体、キスをしようとはしていないしー

と、ミーナがアリシアの方を見て、次いで俺の顔を見る。ミーナの目と俺の目があった瞬間、ミーナがにんまりと笑いー

「んー！　せんせいー？　ちゆう、まだあ？」

そう言いながら目を瞑り、口を可愛らしく尖らせるミーナ。

そして、遂に殺気の様なものが出始めたアリシアが、つかつかと此方に歩み寄ってくる。

「あ、いや、ミーナ!?　あ、アリシア、これは違つ、違うんだよ!?　そういうのじゃなくて、そもそもキスしようとー」

「先生、もう口を閉じてください。……それ以上、聞きたくありませんから」

そう言つて、アリシアが俺の顔を手で包みこみながらを覗き込んできくる。

思わず振りほどこうとして、けれど何故か一ミリも動かさない。

「先生ー」

アリシアの顔が近づいてくる。普段と違う、まるで妙齢の女性のような雰囲気のアリシアに、思わず目を閉じてー

「んー!」

閉じていく視界の隅に、綺麗な銀髪の見えた気がした。